

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：13902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2019

課題番号：19K23313

研究課題名（和文）アメリカにおける幼児期社会科カリキュラムの研究

研究課題名（英文）A Study on the Social Studies Curriculum for Early Childhood in America

研究代表者

西野 雄一郎（Nishino, Yuichiro）

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：00850398

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、アメリカの低学年社会科の動向についての解明を試みた。全米社会科協議会によると、幼い子供を含む全ての子供たちのための社会科の中心的なねらいは、子供たちが公の生活の中で活動的になること、市民として参加をすること、民主主義の思想や価値観のために献身的であることなどの市民的な態度の形成であることを示している。『幼児期のカリキュラム』においては、そのような社会科で身に付けるべき態度を涵養する方法を、様々な心理学者の理論や教育現場の実践を踏まえて、幼児期から低学年期における子供たちの発達段階に即した形で提案している。その方法の核となるのが、探究型学習を核とするカリキュラムだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学習指導要領改訂により、各学校において内容ベースから資質・能力（コンピテンシー）ベースへとカリキュラムの重点をシフトする必要性に迫られている（石井英真、2015年）。各教科においては枠組み自体を資質・能力ベースに再編する必要がある。本研究結果は、その再編の1つの在り方として、探究的な学習を核として、各教科の汎用的スキルを活用・習得する方法を提示することができる。労働や社会生活の知性化や流動化が進む中で、「コンピテンシー」概念は、特定の職業に固有のものというより、教科・領域横断的で汎用的なものを中心に捉えられる傾向にある故、この方法がその具現化の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we tried to interpret the trend of lower grade social studies in the United States. According to the National Council for the Social Studies, the primary purpose of social studies is to help young people make informed and reasoned decisions for the public good as citizens of a culturally diverse, democratic society in an interdependent world. In the "Infant Curriculum", children from early childhood to lower grades learn how to cultivate such attitudes in social studies, based on the theory of various psychologists and practice in educational settings. It is proposed in a form that matches the developmental stage of. The core of the method have been a curriculum centered on inquiry-based learning.

研究分野：生活科、低学年社会科、総合的な学習の時間

キーワード：探究 低学年社会科 アメリカ 生活科

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

生活科教育の社会科教育への系統性に関する論議は、生活科創成期より今まで頻繁にされてきた。新学習指導要領においては、生活科と幼児期や中学年以降の学習との関わりを重要視する一方で、解説では「このような関連を踏まえつつも、殊更知識や理解の系統性に気を取られることがあってはならない。」と、生活科固有の学び(自分との関わりを通しての、また思いや願いを大切に学ぶ)の大切さを強調している。

さて、我が国においては「貧困格差」、「移民の受け入れ」、「教育現場でのいじめ」、「LGBT」などが近年の社会問題として取り上げられ、社会科教育で目指す「グローバル化する国際社会に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者」(公民的な資質・能力)の育成が強く望まれる現状である。この社会科で目指す資質・能力のような素地が幼児期や低学年段階にこそ効果的に育成されると主張するのが、アメリカの NCSS(National Council for the Social Studies)である。例えば、人種間の違いについての肯定的な姿勢は、幼い段階で身に付けた方が発達段階的に価値があるという。子供たちが中学年、高学年段階へと成長するにつれて、多文化への否定的な認識が固定化されてしまうためである。しかし、我が国の生活科教育において、社会科で目指される資質・能力の育成へとつなげる実践を行う学校は少ない。その理由は、社会科への系統性に偏ることを危惧することが考えられるが、生活科固有の学びを大切にしながらも、そのような資質・能力の基礎を育むことは可能ではないだろうか。生活科固有の学びを大切にしながら、社会科で目指す資質・能力を育成することができる生活科教育を検証し、生活科を中心としたカリキュラムを改善することが喫緊の課題である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、生活科固有の学びを大切にしながら、社会科で目指す資質・能力を育成することができる生活科教育について検討し、生活科を中心としたカリキュラムを改善することだった。アメリカの低学年段階における探究的な社会科カリキュラムと我が国の生活科を中心としたカリキュラムとを比較・分析することによって、生活科教育の在り方を問い直すことを目的として研究に着手した。

### 3. 研究の方法

本研究においては、クローグとモアハウス (Suzanne L. Krogh & Pamela Morehouse) 著の『幼児期のカリキュラム』( *The Early Childhood Curriculum* ) を基本資料として、まずはアメリカにおける低学年期の社会科カリキュラムの動向についての解明を試みた。次に、アメリカの低学年期の社会科カリキュラムの核となっている探究的学習の理論と実践について、同書やカッツとチャード (Lilian G. Katz & Sylvia C. Chard) 著の『子どもの心といきいきとかかわりあう』( *Engaging Children's Minds: The Project Approach Second Edition* ) に基づいて明らかにした。また、それらから得られた知見を我が国の生活科や幼小接続にどのように生かせるのかを考察した。

### 4. 研究成果

#### (1) アメリカにおける幼児期・低学年期の社会科教育の動向

市民性の獲得に備えて幼い子供たちを教育する概念は、19世紀後半のアメリカにおいて最初に根付いたものである。当時、移民の子供たちを受け入れるプレスクールと幼稚園が劇的に増加した。保護者を巻き込んだ当時の早期教育運動において、親と子供の両方における究極の目標は「新しい文化のための社会化と責任ある市民性の育成」であった。

幼児期・低学年期の環境は社会に合わせて進化してきた。1970年代に NCSS は幼児期の委員会を創設した。NCSS は社会科が幼い子供たちに次のようなことを可能にすると説明した。「自分が属するグループに今すぐ参加し、将来の大人としての参加だけに目を向けないようにする。民主的参加型の学校や教室の環境は、実社会の学習のこの類型に不可欠である。」(NCSS, 1989)

幼い子供たちへの社会科教育の在り方は、J・デューイの哲学に基づいた。デューイは、幼い子供たちは様々な社会科学を勉強するのではなく、彼ら自身が社会学者になることの必要性を強調した。近年においてもその哲学を引き継ぎ、幼い子供たちをその教科の受動的な生徒ではなく、地理学者、歴史家、人類学者などとみなす、積極的な関与の必要性が強調されている。

#### (2) アメリカにおける探究的学習

デューイの哲学に基づき、アメリカにおいて、低学年期の社会科カリキュラムは探究的な学習を核に展開される事例が多くある。以下に、探究的学習の過程において社会科の目標達成を目指す実践事例を提示する。実践事例はモアハウス(実践事例文中ではパム教諭)の行った幼稚園児と1年生が在籍する教室での実践である。パム教諭が飛行機のパイロットであることを知った子供たちは、本格的な飛行機づくりへの興味に基づき調査を行っていった。

飛行機における徹底的な子ども主導の調査の後、クラスの子供たちは彼らの教室に本物に近い飛行機づくりをすることを助けてくれる地元の建設業者を雇うことを決めた。もちろん彼らに払うためのお金はなかったが、代わりにその教室のヴァーミカルチャーからのミミズが建設

業者さんを誘惑した(彼らは彼が釣り人であることを知っていた)。子どもたちはベニア板で、4人乗り座席付きの、彼らが乗れるくらいのサイズの飛行機をつくった。彼らはサンドペーパーで磨くこと、「本物の飛行機」のヨークを備えたインストゥルメントパネルを作ること、そして色を塗ることに参加した。また、天井から雲をぶら下げた。これを創作する前、彼らは天気や雲の形を調査した。

子供たちの言う、その次に必要なものは、飛行機乗り場だった。チェックインテーブルは設置され、子供たちは乗客を決めた。そして乗客の荷物はフロアスケールで計量され、基準を超えないように重量が計算された。チケットが作られ、チケットの価格も決められた。

しかしその後、新たな問題が生じた。この飛行機はどこに飛んでいくべきなのか。パム教諭は、さらにカリキュラムを統合し、生徒の興味に基づいた学習が続くことを期待し、子供たちに彼らが行きたいと思う場所について一晩考えるように頼んだ。その晩にパム教諭は、4年生の担任教諭と相談して、4年生の何人かが幼い子供たちを助けることができるかどうか、また、どのように助けてもらうことができるかを考えた。

次の日、子どもたちは飛ぶための場所のアイデアをたくさんもって学校に来た。4年生のパートナーも選ばれた。長い対話の後、各ペアは調査するための目的地を決めた。カナダ、中国、エジプト、フロリダ、インド、メキシコ、ニューメキシコ、サギノーなどがあつた。いつも直接体験による子どもたちの学習に焦点を当てていたパム教諭だが、実際にこれら全ての場所を訪れることは不可能だった。しかしながら、子供たちには家族や友達があり、地元には旅行会社があり、本で調べることができ、そして4年生のペアの助けもあった。子どもたちは自分たちの行き先について調査した。調査対象は、天気、休日、住居、服、その地域のゲーム、ペット、そして学校などを含んだ。その生徒たちが答えを見つけ出したとき、彼らはグラフや表で情報を比較した。彼らはカラフルな三つ折り旅行パンフレットを作った。お互いの目的地のための大きなポスターも作られ、飛行機が飛んでいる場所をパイロットや乗客に思い起こさせるためにその飛行機の前のイーゼルに置かれた。最終的にクラスは旅行会社を設立し、彼らの作った資料と共に、それをストックした。

そして、そう、ついに、その青色と赤色、高いウィング、4つの座席、ベニア板製の飛行機は完成した。子どもたちは中に入って離陸することを懇願した。その後何カ月もの間、飛行機とそれからの派生的な活動は豊富なロールプレイと学習経験を提供した。その生徒たちは教室へのお客さんと共に彼らの専門的知識を共有することにより、他の土地について、またはその土地の人々への新しい理解を得た。想像力によって動力を供給されるその小さく赤い飛行機は、存在価値を放っていた。

以上が、社会科カリキュラムの中で実践された探究的学習の一例である。アメリカにおいては、このように教科カリキュラムに探究的な学習が位置づいていることもあれば、探究的な学習に基づいて各領域のアカデミックなスキルを統合している事例もある。その事例は本研究成果「アメリカにおける幼児期から低学年期の探究型学習についての研究」に記載した。

### (3) 生活科教育への示唆

学習指導要領改訂により、各学校において内容ベースから資質・能力(コンピテンシー)ベースへとカリキュラムの重点をシフトする必要性に迫られている。石井(2015)によると、労働や社会生活の知性化や流動化が進む中で、「コンピテンシー」概念は、特定の職業に固有のものというより、教科・領域横断的で汎用的なものを中心に捉えられる傾向にある。各教科の授業で、また、学校教育全体で、そうした汎用的スキルをどう意識的に育てていくのが問われている。このような状況において生活科に求められる役割は大きい。

生活科は具体的な活動や体験を通す中で育まれた思いや願いを実現していく教科である。この「思いや願いを実現していく」というのは、問題解決の過程であり、探究的な過程である。よって、アメリカの探究的な学習の理論を生活科学習に援用する素地はできているといえる。

本研究の目的は、生活科固有の学びを大切にしながら、社会科で目指す資質・能力を育成することができる生活科教育について検討し、生活科を中心としたカリキュラムを改善することだった。しかし、そこまで至るに及ばなかった。そこに至るまでには、アメリカにおける探究的学習について、また、アメリカの社会科カリキュラムについて、より知見を深め、それらの関係性について分析する必要があるからだ。令和2年度に採択された課題は「アメリカのK-2探究的学習理論・実践を活かした生活科探究的学習理論・指導法の確立」(若手研究)である。今後の展開としては、アメリカの探究的学習についてさらに追究し、アメリカの社会科カリキュラムについても研究していく。その中で、学校カリキュラムの中での生活科の在り方について問うていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西野雄一郎	4. 巻 69
2. 論文標題 アメリカにおける幼児期から低学年期の探究型学習についての研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告, 教育科学編	6. 最初と最後の頁 9 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西野雄一郎	4. 巻 5
2. 論文標題 幼児期の探究的な活動を促進する環境構成に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知教育大学教職キャリアセンター	6. 最初と最後の頁 17 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西野雄一郎
2. 発表標題 アメリカにおける幼児期段階の探究型学習についての研究
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----